

研究ノート

幕末の太宰府と五卿の西遷

——太宰府の「五卿関係遺蹟」の再検討を中心に——

竹川 克幸

はじめに

今から約一五〇年前の幕末期・慶応年間（一八六五～六八）、太宰府は幕末政局の表舞台に登場する。三条実美（従三位権中納言）をはじめ、三条西季知（正二位行権中納言）、東久世通禧（正四位下行左近衛権少将）壬生其修（従四位上行修理権大夫）、四条隆謨（従四位上行侍従）ら「五卿」と呼ばれる五人の尊王攘夷派の公卿達が太宰府に移転・滞在する、いわゆる「五卿の西遷（西竄）」である。

彼ら「五卿」は、当初は七人の公卿グループ「七卿」で、尊皇攘夷派の長州藩の朝廷内における政治工作に加担し、文久三年（一八六三）、その動きに対峙する公武合体派の薩摩藩と会津藩が画策した「八月十八日の政変」により、七卿は京都の朝廷を追放され、長州へと落ち延びた。これを俗に「七卿落ち」（「七卿西竄」という。「七卿」のうち、澤宣嘉（正五位下行主水正、生野の変に参加、後伊予小松藩・長州に脱出、明治新政府で外務卿へ）と錦小路頼徳（従四位上行右馬頭、病没）の二人の公卿は、途中で離脱し、「五卿」となった。五卿はその後長州藩領内（三田尻・山口・長府）に滞在するが、元治元年（一八六四）「禁門の変（蛤御門の変）」を経て朝敵となった長州藩が、幕府軍による「第一次長州征伐」を受けて降伏した後、幕府側が征長軍解兵・講和の条件として五卿の長州藩外への退去・引き渡しを長州藩に

要求し、五卿の移転（「御転座」・「御動座」・「御遷座」）・受入先が争点になった。征長総督参謀の西郷隆盛や吉井幸輔ら薩摩藩士と福岡藩家老加藤司書や月形洗蔵、早川勇（養敬）ら福岡藩の勤王派の志士たち（筑前勤王党）の調停・国事周旋もあり、福岡（筑前）・久留米・佐賀（肥前）・熊本（肥後）・薩摩（鹿児島）藩の五藩が五卿を一人・一ヶ所ずつ分担して預かるという形で、「五卿」の九州、筑前・福岡藩領への渡海・移転が決定した。

五卿一行は、元治二年（慶応元年）一月、関門海峡を越え洞海湾に入り、福岡藩領の黒崎湊・黒崎宿に上陸、一時、赤間宿に滞在し、同年二月に、太宰府・延寿王院へと移転した。途中、幕府目付（五卿守衛取締方）・小林甚六郎らの五卿奪還の動きを薩摩藩などの尽力・周旋で回避し、慶応三年に復官・朝廷に復帰・帰洛するまでの約三年間を太宰府に滞在して過ごした。慶応三年十二月、王政復古の大号令の前夜、朝議にて赦免され、五卿は官位や諱が復され、帰洛し朝廷に政治復帰すると、明治維新後は、三条実美は太政大臣や内大臣に、他の四人も参与に任ぜられるなど、それぞれ明治政府の要職に就いた。

幕末太宰府の歴史は、「五卿の西遷（西竄）」＝「太宰府移転」とそれに伴う「五卿送迎（応接）」前後の政治状況を中心に、中岡慎太郎ら五卿随従者に加え、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允（桂小五郎）、伊藤博文（俊輔）、高杉晋作（元治元年の筑前亡命、太宰府・五条中村酒店への潜伏の伝承有）、坂本龍馬など、太宰府・五卿の元を訪れた勤王の志士達の「往来と交流、周旋活動」の事蹟が、「征長解兵」・「薩長和解」など福岡藩勤王派志士の活躍の一つ、「明治維新の起原」を持つ「明治維新の策源地・太宰府」の象徴的な出来事として、戦前期は、五卿や随従者自身はもちろん、関係した旧藩士や旧志士達によ

る明治維新の回顧録や懷旧談も含め顕彰されてきた。また江島茂逸や高原謙次郎ら郷土史家の編纂・著述した郷土誌の中でも、明治三十五年（一九〇二）の菅公一千年忌の大祭を契機に「菅原道真公のご神徳」による「天神様菅公の聖地太宰府」への「五卿の送迎・遷座・流寓」という独特の史観で語り継がれてきた。特に、『維新起原太宰府記念編』の中で「五卿送迎」は「菅原道真の左遷」「蒙古襲来（元寇）」らと共に「太宰府の三大記念」の一つとして最重要視されてきた。『福岡県史資料』の中でも「五卿在筑資料」として関連史料も紹介され、福岡県史の編纂も担当していた伊東尾四郎により『史蹟名勝天然紀念物調査報告書 第九輯 史蹟の部』（福岡県）の中で「五卿関係遺蹟」として紹介されている。そして、昭和十年（一九三五）の「五卿西竄七十年記念（祭）」を機会に、太宰府天満宮・太宰府五卿顕彰会（現在は公益財団法人太宰府顕彰会へ継承）を中心に「五卿記念館」の設置も計画され、「五卿と太宰府」の刊行や記念事業などで顕彰された。^①

戦後も長沼賢海氏や井上忠氏、丸山雍成氏らによる「幕末の太宰府・五卿の西遷」に関する諸研究があった。^②『太宰府市史』では、梶原良則氏により、幕末福岡藩の政治動向や政治史的意義と共に「五卿の太宰府移転」について詳述された。また日比野利信氏により、「古都太宰府」と「維新の記憶」などの視点から、「五卿の太宰府移転・五卿送迎についての顕彰と研究」の再検討、地域の歴史像の形成過程や郷土史・地域史研究についても再評価がなされた。^③近年では「五卿西竄一五〇年記念」の九州歴史資料館での企画展示なども開催され、一瀬智氏による展示解説や関係史料・資料の再検討もなされた。^④そして、太宰府天満宮宝物殿での五卿ゆかりの品々の展示に加え、「太宰府学」「太宰府検定」など地域学・地域研究や、NHK大河ドラマの影響や

地域観光の面などでも再び注目されてきた。^⑤

本稿では、これまで、幕末・明治維新期の政治史を中心に考察されてきた、「五卿の西遷（西竄）」について、五卿が訪れたゆかりの地や史跡、五卿を応接し交流のあった旧家、五卿関係の「日記」や「書簡」など記録類、和歌・遺墨、ゆかりの品々など五卿の関係史料・資料も含め、主に太宰府周辺における「五卿関係遺蹟」について、五卿の「警衛」・「応接」・「交流」・「周旋」という視点から再検討してみたい。^⑦

一 五卿の筑前・太宰府移転の足跡

元治二年（慶応元年・一八六五）一月十四日に長州藩領（長府功山寺）を出発した五卿一行は、関門海峡を越え、一月十五日に福岡藩領・長崎街道筑前六宿の玄関黒崎湊・黒崎宿に上陸し、木屋瀬宿・赤間宿など赤間往還・唐津街道を経由して、同年二月十三日に福岡藩領、太宰府・延寿王院へと移転した。途中、赤間宿では約一ヵ月ほど福岡藩の御茶屋に滞在した。「五卿在筑資料・七卿在西日誌」によれば「同二十日 予等五人五処二分離之談アリ。赤間御茶屋、三條殿、御引受黒田家。宗像郡山田村増福寺三西殿、細川家。遠賀郡高倉村神伝院、予、通禪有馬家。宗像郡陵巖寺村正法寺、壬生殿、薩州。吉田村鎮國寺、四條殿、鍋島家。」など福岡藩の保守派勢力（俗論派）の意向で五卿は分離させられる危機もあったが、結局土方久元ら随従者の反対もあって撤回され、五卿揃っての太宰府移転で決定した。太宰府移転決定前の元治二年二月七日（五卿在筑資料・七卿在西日誌）には、随従者の水野正名・三宅左近らを太宰府に派遣し下見・検分に行かせ、「土地ノ風韻ヲ有シ高貴ノ閑居ニ適セリ」（『七卿西竄始末』第五卷）と太宰府が五卿の移転・遷座の場所に最適だとの報告を受けてい

る。五卿一行は赤間から青柳・箱崎・板付・雑餉隈を経由し太宰府に移転する際、白砂青松の景勝地で知られた「海の中道」の景色・旅情を楽しんだり、香椎宮や筥崎宮などにも参詣している。

二 五卿の警衛・応接

太宰府での五卿は福岡藩・薩摩藩・熊本藩・久留米藩・佐賀藩の五藩へお預けの身分となった。薩摩藩を中心に、地元福岡藩からは他に「応接掛・随従・宰府茶屋奉行財事掛」などの担当役職もあり、警衛（警固）・「守衛」とも）担当の五藩からそれぞれ太宰府在住の五卿の警衛役、「周旋・応接方」が出務するなど警備・応接の動員があった。五卿の随従者や警衛の藩士達は、太宰府天満宮の社家・宿坊や町家などに分宿し太宰府に滞在した。また五卿警衛時の各藩の宿所が描かれた絵図「五卿滞在中警固投宿図」（個人蔵、太宰府市文化ふれあい館『まるごと太宰府歴史展』図録などに掲載）も残る。また内山・北谷方面や針摺・石崎方面などには、支藩の秋月藩の出張による警備動員もあった。

今でも西鉄太宰府駅周辺の参道の門前町にはかつての「大町旅館街」と呼ばれた名残があり、幕府の定宿「日田屋」、薩摩藩の定宿「松屋」、長州藩の定宿「大野屋」、現在は「菓子屋・梅園」で知られる「和泉屋（泉屋）」、「大和屋」などの屋号や建物跡が残り、五卿の随従者や五卿を面会に訪れた志士なども分宿・滞在したり会合や宴会などで利用したようである。

三 五卿と志士の往来・応接・周旋

太宰府に移転した五卿の下には、中岡慎太郎（変名大山彦太郎など）

や土方久元（南大一郎）ら土佐（高知）藩脱藩士、戸田雅楽（尾崎三良）や武部諫尾（清岡公張）、久留米藩脱藩士で勤王派の首領水野正名（溪雲斎）ら随従者に加え、西郷隆盛（吉之助）ら警衛の薩摩藩士、田中顕助（光顕）ら土佐藩士、渡辺昇ら大村藩士、福岡藩の月形洗蔵、早川勇、野村望東尼、そして坂本龍馬など多くの「勤王の志士」が訪れている。彼ら「勤王の志士」は太宰府で会合・談合し、情報を交換、交流し維新回天に向けて国事周旋を図ったことは前述のようによく知られている。坂本龍馬は「坂本龍馬手帳摘要」には、「廿三日宰府に至ル。渋谷彦助に会ス。廿四日伝法（転め）（三条実美）ニ謁ス。小田村ニ会ス。廿七日又謁ス。廿八日宰府ヲ発ス。」とあり、慶応元年（一八六五）年五月二十三日から二十八日まで太宰府に滞在している。龍馬は、「（前略）偕此内兄玉直右衛門（薩摩藩士）付添坂本龍馬爰元へ差入、私共江曳合之上五卿方江致拝謁（後略）」（「慶応元年閏五月十四日御国許西郷吉之助宛、宰府渋谷彦介・蓑田新平書簡」と、薩摩藩士兄玉直右衛門の仲介・付添で太宰府入りし、五卿の守衛で太宰府に滞在していた薩摩藩士渋谷彦介・蓑田新平らの仲介で五卿に拝謁し、渋谷彦介や長州藩士小田村素太郎らに面会し国事周旋を図っている。この際に、龍馬は小田村や五卿随従者の土方久元や中岡慎太郎らと共に、「薩長和解・提携」に向けて周旋したといわれる。『東久世伯爵公用雑記』には、「（五月）廿五日土州藩坂本龍馬面会。偉人ナリ。奇説家ナリ」と龍馬と面会した際の印象を記している。

また、坂本龍馬と太宰府で面会した長州藩士の小田村素太郎（小田村伊之助・素彦、後の楢取素彦）も「塩間鉄造」と変名の上、五卿応接・周旋の使者として太宰府の五卿の下を訪れたり、森寺大和守ら五卿の使者が太宰府から長州に訪れた際に応接している記録（『楢取家文書』

「太宰府滞留五卿関係書類」などがある。⁽¹²⁾

そして西郷隆盛以外にも吉井幸輔（『五足の靴』の紀行や太宰府天満宮内・お石茶屋付近の歌碑「太宰府のお石の茶屋に餅くへば、旅の愁ひもいつか忘れむ」で知られる吉井勇の祖父）・大山格之助（綱良）・黒田嘉右衛門（清綱）・渋谷彦介・蓑田新平・前田杏（斎）など多くの薩摩藩士も五卿警衛で太宰府に訪れ滞在し、五卿や各藩の志士たちと会合し、「幕府による五卿の奪還阻止」・「五卿の帰洛・政治復帰」などの国事を政治目標に、様々な周旋活動を行っている。特に、『回天実記』などの記事にも多く登場し五卿にもたびたび面会し、五卿随従者の戸田雅楽と共に長崎の景況視察にも随行した医師の前田杏の存在・活動などは今後、五卿の警衛・応接や薩摩藩の太宰府での国事周旋活動の実態を説明する上では重要であると思われる。

『回天実記』では、土方久元らが警衛の薩摩藩陣営で豚汁の馳走を振る舞われたり（慶応三年三月六日）、松屋や大野屋・和泉屋など旅宿で各藩の志士たちと会合する記事なども多く出てきて、太宰府で交流・親交を更に深めたようである。薩摩藩や長州藩、土佐藩など雄藩を中心とする薩長同盟や薩土盟約など「諸藩同盟・提携」の前提である志士の「同志的結合」や諸藩間の「和解・連携」に向けての素地は、五卿や随従者に加え、五卿警衛で滞在していた薩摩藩、福岡藩など五藩や長州藩・脱藩の志士などを介して太宰府で確立しようとしていたとも言えるだろう。

四 五卿の生活と交流―「五卿関係遺蹟」―

「五卿滞在記録」や「五卿関係遺蹟」など関係史料・資料により、太宰府における五卿の生活や地域との交流について概述する。「五卿滞

在記録」によれば、五卿は長州藩領内では賓客扱いであったが、福岡藩領・太宰府では、太宰府に左遷された菅原道真同様、延寿王院へ「謫居・幽閉」の状態で明日をも知れぬ流適な生活境遇で、「五人衆」などと呼ばれ、罪人扱いであった。しかし一人当たり「月百両（後に二百両に増額）」など過分な生活費の支給や饗応、特産・名物の「博多織帯地」（博多）素麺」など贈答品の応接を受け、待遇は公卿ということとで破格であった。彼らは、四書五経や歌集・詩書の購読や連歌奉納・祈禱、馬術や鉄砲などの武事鍛錬を怠らず、来るべき帰洛・朝廷での政治復帰の日に備えていたという。⁽¹³⁾

受入側の太宰府天満宮・延寿王院では、安楽寺天満宮別当で三条実実の父実萬と従兄弟の大鳥居信全や子の信巖、真木和泉守の甥にあたる太宰府天満宮の神官小野加賀家出身の小野隆助なども五卿の太宰府移転・受入への尽力はもちろん、太宰府移転後も五卿を物心両面から支え、応接・周旋した。⁽¹⁴⁾

現在の太宰府天満宮の境内で、参道の突き当たりに位置する築地堀に囲まれた建物、かつて安楽寺天満宮の宿坊であった延寿王院（現在は宮司、西高辻家）には、「五卿謫居の間（現在非公開）」があり、梅や柿の古木のある庭園には「五卿遺蹟」の記念碑（昭和十六年十月、伯爵金子堅太郎撰・西高辻信雄書）が建立されている。また明治維新後、五卿にゆかりするものということで廃仏毀釈の難を逃れた延寿王院の山門前には、大正二年（一九一三）に建立された「七卿西竄碑」など五卿ゆかりの史蹟・記念碑も残っている。

「謫居・幽閉」状態であった五卿は、散策など移動可能な範囲は太宰府を中心に一里四方に制限されていたようだが、その一方で実際には五卿や随従者達は、太宰府における菅原道真の伝説・伝承同様に多

くの場所に出かけ行動している。⁽¹⁵⁾

五卿は二日市の湯町・武蔵温泉（現在の二日市温泉）への湯治や、都府楼跡、四王寺山・宝満山・天拝山など太宰府周辺の名所・旧跡、周辺の村々を度々訪れている。他にも長崎街道筑前六宿の飯塚宿や内野宿や山家宿、薩摩街道の松崎宿（小郡市）、四三嶋（筑前町）の牧場や大庭村（朝倉市）、秋月城下などにも馬の遠乗りや視察、地元の人々との会合などで遠出している。⁽¹⁶⁾

また福岡藩重臣の三奈木黒田家（家老黒田播磨所領）をはじめ、通古賀の陶山家、湯町・古賀の松尾家（温泉奉行）、山家の山田家（洗心亭）、乙金の高原家、宇美の小林家（萬代酒造・竹亭）、夜須や大石村の岡部家、吉木の柴田家、阿志岐の平山家など庄屋や酒造家など地域の有力者、旧家にもたびたび訪れ、饗応・応接を受け、彼らに政治や資金協力を要請するなど交流したという。⁽¹⁷⁾

そして、「博多・太宰府図屏風」などの作品で知られる秋月藩の御用絵師で、太宰府に隠棲した齋藤秋圃の弟子、太宰府の絵師吉嗣梅仙、萱島鶴栖など地域の知識人・文化人と交友し、各地に詩歌や書画などの作品を数多く残した。今でも五卿を応接し精神・物資両面から援助した五卿ゆかりの旧家には、五卿ゆかりの詩歌の短冊や掛け軸が家宝として残る。

他にも筑紫野市内の二日市温泉湯町（大丸別荘付近）や天拝山周辺、武蔵寺や御自作天満宮、筑前勤王党で薩筑長連合周旋に尽力した月形洗蔵（一時期、湯町古賀に幽閉）とも親交があった元温泉奉行の松尾家付近などには、五卿ゆかりの記念歌碑が残る。太宰府市内においても、太宰府市西鉄五条駅付近にある旧古川家の屋敷地跡の金掛天満宮境内の三条実実「梅が枝にかかる黄金の花もまた根にかへりてや咲き

いづるらむ」の歌碑や前述の太宰府天満宮境内・延寿王院の記念碑をはじめとして、「五卿関係遺蹟」が残る。

五 太宰府における「五卿の応接・周旋」

↳ 松屋・栗原孫兵衛と陶山一貫との交流

太宰府における「五卿関係遺蹟」として、太宰府天満宮の門前町で旅宿・旅館業を営んでいた松屋・栗原家と通古賀の医師で勤王家の陶山家がよく知られる。

太宰府天満宮の門前町にあった旅宿、かつての薩摩藩の定宿「松屋」（現在「維新の庵松屋」）の栗原家は、先祖の栗原孫兵衛（順平、雅号は「松籟堂」と号す）が勤王の志士であった。⁽¹⁸⁾ 孫兵衛は社領組頭（明治維新後は年行司や社領相談役）など民政にも参加し、地元の顔役で義侠心に厚く和歌や連歌など風雅の道も好み、国学（平田国学）にも傾倒し、太宰府天満宮境内の「和魂漢才碑」の建立に尽力した。勤王の志士の周旋に熱心だったようで、薩摩藩の西郷隆盛や大久保利通、福岡藩の平野国臣などの志士が松屋を訪れ・滞在した志士達の書簡や和歌短冊などの資料が残る。特に、安政の大獄で追われ、西郷隆盛と鹿児島湾（錦江湾）に入水し非業の最期を遂げた勤皇志士・清水寺の僧、月照を松屋が匿った逸話に因む「言の葉の花をあるじに旅寝するこの松かげは千代もわすれじ 月照」の和歌（和歌掛軸、松屋の庭園に記念歌碑）はよく知られている。また松屋に滞在していた西郷隆盛が手燈明でお祈りをしていた逸話なども残る。

孫兵衛は加藤司書や月形洗蔵ら福岡藩の勤王派・筑前勤王党が壊滅に追い込まれた、いわゆる福岡藩の勤王派弾圧事件、慶応元年（一八六五）の「乙丑の獄（変）」で獄舎に繋がれたが、明治維新後に赦免され、

大正二年（一九一三）にはその功績により従五位の贈位を受け、記念の申告祭が開催されたという。

「元治元年十二月 五卿方御受取御用金銭出入帳」（元治元年十二月）慶応元年六月までの出納書き上げ記録。福岡藩士・上野右内の記録。『五卿滞在記録』に採録）によれば、「三月十六日、一同三百八拾九匁五分 松屋ニ而水野溪雲齋出会入目正金貳分三朱酒肴汲物共貳兩貳分薩州肥後佐嘉久留米出会之時汲物菓子酒肴御茶漬共其節暫女糸代八ッ八メ八百文分共 松屋孫平渡」や「五月廿五日（天神様の縁日）一同拾匁八分 御用便方々長府分の使者答礼焼もち（梅が枝餅か）百八代松屋孫兵衛渡」など、五卿滞在時の諸経費や出入り商人・業者などの記述の中に松屋の名前があり、五卿の生活や経済活動に支援者として周旋・協力を惜しまなかったようである。また、『回天実記』によれば、「暮頃より松屋并大野屋にて薩士数輩と会合」（慶応三年九月十七日）、「暮比より於松屋大村藩渡辺昇に会合」（同年九月二十一日）など松屋での会合が散見される。そして、「元治二年二月二十三日付、月形洗蔵から松尾富三郎宛の書簡」（「松尾家文書」）には、「（前略）然者今夕、薩州西郷吉之助鴻池山中成太郎同道ニ而、宰府松屋迄参居申候間、塩猪肉鯉魚杯御恵被下候半ニハ、此上之大慶無御座候（後略）」と、月形が友人の松尾富三郎（光昌・山大夫）に対し、松屋に滞在する西郷隆盛らに塩漬猪肉や鯉の差し入れを依頼したことが記されている。⁽¹⁹⁾

五卿や随従者の応接・周旋に尽力した松屋・栗原家には、五卿や土方元・清岡公張ら従者達が松屋栗原家に世話になった謝意を示す目的で編纂された書画集「英華帖」などの記録・関係資料も残る。⁽²⁰⁾

松屋・栗原孫兵衛（順平）の事蹟が刻まれた墓碑（碑文は『福岡県

碑誌』に紹介）が、西鉄太宰府駅付近の光蓮寺境内（現在は鐘楼付近に移動）に残る。その横には、元土佐藩士で五卿に随従（三条実美の従者）しながら結核の病にかかり、志半ばで、自刃してその生涯を閉じ、「勤王の志士・忠公」の象徴とされた山本忠亮の墓碑もある。山本は本来は光明寺に埋葬されたよう⁽²¹⁾で、なぜ山本の墓碑が栗原家の墓碑のそばに移設されたのか経緯が不明な点もある。

また、同じく太宰府内で五卿と交流があった人物として、通古賀在住の医師で、野村望東尼などとも親交のあった勤王の志士・陶山一貫（翁）がいる。⁽²²⁾ 陶山一貫と三条実美の父三条実萬（忠成）とは旧知の仲で、上京した折に実萬から拝領した「赤心報国」の書（掛軸）が陶山家に所蔵されていた。三条実美は父の書との再会に感動し、「廻り来て旅路に見るそなつかしきかへらぬ父が水茎のあと」という和歌を詠んで陶山一貫に与えたという。それが縁で実美をはじめ五卿は、従者・志士を引き連れ、しばしば通古賀の陶山家を訪れ、国事について談合し親交を深めたようである。三条実美の遺詠集『梨の片枝』下巻（高崎正風編）には、実美が、陶山邸で詠んだ和歌なども出てくる。⁽²³⁾ 『回天実記』によれば、慶応三年十二月十九日の五卿の帰洛への太宰府出立の際は、別れを惜しんで夫婦にて関屋・刈萱の関趾まで出向き、別れの挨拶（「暇乞」・見送り）をしている。その際、五卿一行の前を無礼に通過した秋月藩士島村文太夫の騷動を、島村の知人であった陶山一貫が機転をきかし、「高砂」の謡の一曲を披露して奉祝し、陰悪な場の雰囲気を一変させ事なきを得た逸話も記されている。⁽²⁴⁾

通古賀・王城神社付近の陶山家の旧宅庭園（現在個人宅）には三条実美が帰洛の記念と感謝の気持ちで宝満山からの小松を植樹したという「三条公御手植（栽）の松」の（今は二代目）由来と明治二十七年（一

八九四）に西高辻信嚴や小野隆助、一貫の孫の陶山松庵らが發起人となり、建立した「勿翦勿伐」の記念碑が残る。

おわりに

本稿により、太宰府の「五卿関係遺蹟」を中心に、幕末太宰府と五卿の西遷をめぐる、「警衛」・「応接」・「交流」・「周旋」の面での、いくつかの問題点を指摘した。

昨年平成二十七年（二〇一五）は、五卿の太宰府移転から一五〇年目という節目であり、今後、明治維新一五〇周年に向けて、様々な取り組みが活発化し、「五卿の西遷（西竄）」も含め、幕末維新期の歴史への興味関心も高まっていくであろう。

「五卿関係遺蹟」に見られる、五卿が訪れたゆかりの地・応接・交流した旧家などは、現在の福岡県内でも、太宰府市内はもちろん筑紫野市や宇美町、筑前町、朝倉市、小郡市、飯塚市、宗像市、北九州市、福岡市など広範囲に及んでいる。また、在所であった太宰府天満宮（延寿王院）、五卿の警衛・応接を担当した福岡藩、支藩の秋月藩、久留米藩、佐賀藩、熊本藩、薩摩藩の五卿警衛・応接関係史料の再確認は必要であると思われる。また幕末期の太宰府関係史料・資料や五卿関係の史料・資料（遺墨・和歌短冊・絵画・什器類など）やゆかりの地・史跡や訪れた地の足跡、記念碑、交流のあった旧家などの悉皆的な再確認調査と共に、五卿の西遷・応接と諸藩の志士たちの周旋や交流、特に、諸藩間や同志間の連絡・調整や談合・合意形成・政治決定など福岡藩や薩摩藩など諸藩の太宰府における「国事周旋」活動の実態、幕末の太宰府や五卿をめぐる政治状況、「五卿の西遷」が太宰府地域に与えた影響は再検討を要する。

そして、古来より、政治・軍事防衛都市として戦略的優位性を有し、天神様の聖地・門前町・宿場町（宿駅）など「太宰府」の持つ政治的・軍事的な地の利・地勢・都市機能が、志士の有志・同志的結合を促進し、五卿の失地回復・帰洛・朝廷復帰を後押しした要因は何であったろうか。幕末の俚謡に「江戸が見たけりや宰府におじゃれ。やがて宰府は江戸になる」と謳われたようにかつての「天下一の大会」で、「さいふ参り」など江戸期の九州における代表的な観光・巡礼地でもあった「西都・古都」太宰府の持つ「風韻・風光明媚」など都市の品格・優美な景観・風致や人々の応接・周旋力や文化力など「明治維新の策源地」としての太宰府地域の歴史像の再評価については、今後の課題とし再稿を期したい。

註

（１） 戦前の幕末の太宰府の歴史、五卿の西遷の顕彰については、江島茂逸『維新起原太宰府記念編』博聞社、一八九三年、江島茂逸・高原謙次郎『太宰府史鑑』菅公会、一九〇三年、池邊義象『七卿落』辰文館、一九一二年、伊東尾四郎『五卿関係遺蹟』『史蹟名勝天然記念物調査報告書 第九輯 史蹟の部』福岡県、一九三四年、太宰府五卿顕彰会編『五卿と太宰府』一九三五年、太宰府五卿顕彰会編『太宰府五卿記念館建設趣意書』一九三五年、太宰府天満宮五卿記念館『太宰府天満宮と五卿』一九四三年など参照。

（２） 長沼賢海『太宰府の五卿』太宰府天満宮、一九六五年、中野泰雄『七卿西遷小史 明治維新政治史序説』新光閣書店、一九六五年、井上忠『明治維新前後の太宰府天満宮』太宰府天満宮文化研究所編『菅原道真と太宰府天満宮』下巻、太宰府天満宮御神忌千七十五年大祭菅公会・吉川弘文館、一九七五年、井上忠『筑前藩の五卿周旋運動について』『福岡大学人文論叢』六一・二・三合併号、一九七四年、井上忠『明治維新と五卿』古都大宰府を守る会編『太宰府の歴史』6、西日本新聞社、一九八六年、丸山雍成『幕末・福岡藩の政情と五卿落ち』『九州文化図録撰書7 筑前維新の道』図書出版のお工房、二〇〇九年。

（３） 梶原良則『幕末の動乱と大宰府（五卿と大宰府）』『太宰府市史』通史編Ⅱ第二編近世

の大宰府・第五章（第三節）、太宰府市、二〇〇四年、日比野利信「江島茂逸と『維新起原太宰府記念編』」「太宰府市史通史編別編『古都太宰府』の展開」、第三章近代における太宰府研究、太宰府市、二〇〇四年。

(4) 一瀬智「幕末期「五卿」の太宰府滞在について」「五卿と志士―維新前夜の太宰府―」九州歴史資料館 企画展図録、二〇一四年、一瀬智「勤王公家 五卿と太宰府」「西日本文化」四七三号、二〇一五年。

(5) 幕末の太宰府や五卿の西遷（西竄）については、『太宰府市史』通史編や『筑紫野市史』、『宇美町誌』など自治体史類の他、『わがまち散策 太宰府への招待1・2』太宰府市、一九九〇年、古都大宰府を守る会編『太宰府の歴史』6、同7、西日本新聞社、一九八六―一九八七年、太宰府天満宮編『太宰府百科事典―太宰府天満宮編―』財団法人太宰府顕彰会、二〇〇九年、森弘子監修・（財）古都大宰府保存協会編 太宰府検定公式テキスト『太宰府紀行』海鳥社、二〇一一年、『まるごと太宰府歴史展』太宰府市・太宰府市教育委員会・太宰府市文化スポーツ振興財団（太宰府市文化ふれあい館）、二〇二二年、『太宰府人物志』太宰府市、二〇一三年など郷土資料を参照。

(6) 五卿関係史料としては『日本史籍協会叢書99 五卿滞在記録』東京大学出版会、一九二七年・一九七一年復刻、『五卿在筑資料』『福岡県史資料第三輯』福岡県、一九三四年、宮内省図書寮『三条実美公年譜』宗高書房、一九六九年、土方久元『幕末維新史料叢書7 回天実記』新人物往来社、一九六九年、「綱領一三」福岡県立図書館所蔵（『新訂黒田家譜七巻上』文献出版、一九八四年）、「七卿在西日誌（写本）」九州歴史資料館所蔵、『日本史籍協会叢書別編17-22 野史台維新史料叢書 七卿西竄始末一〜六』馬場文英編・東京大学出版会、一九七二〜七四年、「東久世伯西航日記」「同維新史料叢書 別編8 日記一」野口勝一編・東京大学出版会、一九七二年、霞会館華族資料調査委員会編『東久世通禮日記』霞会館・一九九二年、『尾崎三良自叙略伝』上・中、中央公論社・一九七六〜一九七七年、『太宰府市史』近世資料編、太宰府市、一九九六年、「郷土歴史資料叢書第一輯 五卿西遷―早川勇とその群像―」蘿山房、一九八五年などがある。

また、五卿関連の歴史資料・ゆかりの品、遺墨、史跡・歌碑などについては、伊東尾四郎「五卿関係遺蹟」「史蹟名勝天然記念物調査報告書 第九輯 史蹟の部」福岡県、一九三四年、『福岡県明治維新史料展』霊山顕彰会福岡県支部、福岡市博物館、一九九四年、『五卿と志士―維新前夜の太宰府―』九州歴史資料館 企画展図録、二〇一四年、八尋千世『太宰府天満宮 むかしがたり石造物のおはなし』太宰府顕彰会、二〇〇六年、『万葉

といで湯の郷ちくしの 歌碑・句碑を歩く』筑紫野市（観光協会パンフレット）、二〇一四年、『ちくしの散歩30五卿の歌碑』筑紫野市歴史博物館、一九九三年などを参照。

(7) 竹川克幸「明治維新の策源地」太宰府「アクロス福岡文化誌9福岡県の幕末維新」海鳥社、二〇一五年、同「幕末の太宰府と五卿・志士―幕末古都大宰府散歩―」『西日本文化』四七三号、二〇一五年、同「明治維新の策源地となった古都太宰府」『西鉄沿線謎解き散歩』KADOKAWA、二〇一四年など拙稿を参照。

(8) 前掲『五卿滞在記録』など参照。

(9) 「宰府五卿警衛人数書上（慶応三年）」（秋月郷土館所蔵）や「旧藩歴」など秋月藩五卿警衛関係の史料がある。詳細は、三浦末雄『物語秋月史 幕末維新編』亀陽文庫、一九八一年を参照。

(10) 宮地佐一郎「龍馬の手紙」講談社学術文庫、二〇〇三年、五七四〜五七五頁「坂本龍馬手帳摘要」。また、「慶応元年閏五月十四日 御国許西郷吉之助宛、宰府渋谷彦介・荻田新平書簡」については、『同』一一五〜一一八頁に収録掲載の「宰府荻田新平 渋谷彦介ヨリ在国西郷吉之介へ―長州事情探索ノ件」（個人所蔵、鹿児島県歴史資料センター黎明館寄託史料）を参照。

(11) 前掲宮地佐一郎「龍馬の手紙」講談社学術文庫の解説、青山忠正「幕末維新すつきり読める奔流の時代」新人物往来社、二〇一〇年、『楳取素彦伝 耕堂楳取勇傳記』山口県萩市・群馬県前橋市、二〇一四年など参照。

(12) 小田村の変名の「塩間鉄造」については、『日本史籍協会叢書55 楳取家文書一』東京大学出版会、一九三一年、三八一〜三八三頁に収録の「慶応二年十一月、楳取素彦宛福岡藩有志書簡」などに出てくる。また、小田村の太宰府五卿関係の記録としては、『日本史籍協会叢書56 楳取家文書二』東京大学出版会、一九三二年（二〇七〜二一八頁に収録の「太宰府滞留五卿関係書類」①「楳取素彦意見書（慶応元年夏か）」②「慶応二年十一月 太宰府五卿へ御使一件」③「慶応三年五月 太宰府五卿使者応接一件」。

(13) 前掲『五卿滞在記録』に収録の「五卿滞在日記」や「回天実記」などを参照。

(14) 前掲長沼賢海「太宰府の五卿」や井上忠「明治維新前後の太宰府天満宮、浦辺登」『太宰府天満宮の定遠館―遠の朝廷から日清戦争まで―』弦書房、二〇〇九年などを参照。

(15) 前掲「五卿在筑資料」や「五卿滞在日記」、「回天実記」などを参照。

(16) 前掲「五卿在筑資料」や「五卿滞在日記」、「回天実記」などを参照。また、『筑紫野市史』「小郡市史」「夜須町史」「飯塚市誌」、山神明日香「長崎街道筑前黒崎宿での五卿の

宿』(二〇〇四年) など参照。

(17) 前掲伊東尾四郎「五卿関係遺蹟」や、太宰府五卿顕彰会編『五卿と太宰府』、長沼賢海『太宰府の五卿』など参照。

(18) 松屋・栗原孫兵衛(順平) については、『明治維新人名辞典』吉川弘文館、一九八一年、太宰府天満宮文化研究所編『太宰府百科事典—太宰府天満宮編—』財団法人太宰府顕彰会、二〇〇九年、荒井周夫編『福岡県碑誌 筑前之部』大道学館出版部、一九二九年、山内興隆遺稿抄『わが郷土太宰府』、『太宰府人物志』などの「松屋・栗原孫兵衛・順平」の項目を参照。

(19) 「松尾家文書」松尾允之氏所蔵『九州文化図録撰書7 筑前維新の道』図書出版のぶ工房、二〇〇九年に収録掲載。三五頁を参照。

(20) 栗原家資料「英華帖」については、朱雀信城・藤井祐介「資料紹介 栗原家資料『英華帖』について」『年報太宰府学』8号、二〇一四年を参照。

(21) 『回天実記』二四九頁、慶応二年五月九日条に「今夜山本忠亮神葬を以て宰府光明寺へ埋葬致し」と有。

(22) 陶山一貫については、前掲『わがまち太宰府』、『ふくおか歴史散歩』第六卷、福岡市長室広報課編、福岡市、二〇〇〇年、陶山鐵也他編『とおのこが風土記』太宰府市通古賀区、二〇〇三年、谷川佳枝子『野村望東尼 ひとすじの道をまもらば』花乱社、二〇一一年などを参照。

(23) 『太宰府市史 文芸資料編』太宰府市、二〇〇二年、一一〇七頁、一一一九頁参照。

(24) 土方久元『回天実記』三六四、三六五頁、前掲『物語秋月史 幕末維新編』など参照。

(25) 「三条実美公の御手植(栽) 松」の由来については、江島茂逸編『勿剪勿伐 三條公手栽杏由来』陶山松庵、一八九四年や『とおのこが風土記』などを参照。

〔追記〕 本稿は、第3回・第4回「太宰府検定」特別講座の講義内容を基に執筆した。本稿を執筆するにあたり、太宰府発見塾塾長の森弘子先生をはじめ、公益財団法人古都太宰府保存協会(太宰府展示館・史跡解説員・太宰府市文化遺産調査ボランティア・太宰府検定企画委員会)、NPO法人歩かね太宰府、太宰府市文化ふれあい館、太宰府市公文書館、太宰府天満宮・公益財団法人太宰府顕彰会、太宰府天満宮文化研究所・味酒安則氏、松屋・栗原雅子氏、田中誠氏、王城神社氏子会、久芳康紀氏、松尾允之氏、高嶋正武氏、筑紫野市歴史博物館、つくし郷土史会、西日本文化協会、霊山顕彰会福岡支部、福岡地方

史研究会、福岡県立図書館、九州歴史資料館などの方々に、いろいろとご教示、貴重な資料・情報をご提供頂いた。感謝申し上げます。

(たけがわ・かつゆき 日本経済大学講師)